十世 伊藤伝七（いとうでんしち）

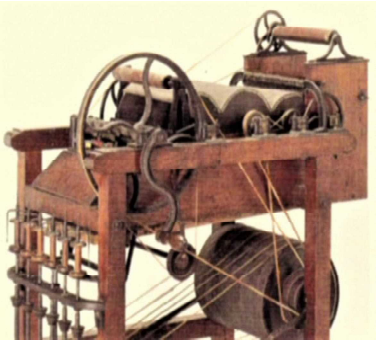
糸と技術の心を紡ぐ
－東洋一の大紡績会社を築く－

伊藤伝七（1852 ～ 1924）
出典：『東洋紡績 70 年史』

十世伊藤伝七は、三重県室山村で生まれる。伊藤家は室山村では農業、質商、米穀の仲買を兼業していた。九世伊藤伝七と従兄弟の伊藤小左衛門は、伝七家の長男小右衛門に製糸をやれ、次男左衛門には製茶をやれ、伝一郎（後の十世伊藤伝七）には紡績をやれと遺言のように言っていた。伝一郎は26才のとき修行のため1877（明治10）年堺紡績所の見習工として、労務に従い工程の実地指導を受け、経済の運用、帳簿の整理など視察と研究を遂げ父に報告した。父九世は報告を聞き紡績工場建設の決意を固めた。

■三重紡績の出発点となる手回し米紡機

伊藤小左衛門は生糸の取引で横浜を往来する時に手回し米紡機を発見し1875（明治8）年購入した。紡機は綿糸の製造を試みに運転されたが、実用化しなかった。政府は民間に奨励して紡績所の設立のため、紡績機を無利子10年賦返納で払い下げをした。伊藤伝七と伊藤小左衛門は、1880年機械払い下げを受けて、三重紡績所設立となった。紡績所は父九世伊藤伝七の願いで川嶋村に決めた。工場は紡機の運転で操業できた、1882年8月22日を落成の事とした。開業後の成績は思わしくないのは、綿糸の悪質さと水量不足にあった。水量不足を補うために蒸気機関を導入したが、動力不足のため機械の半分しか運転できなかった。当時の紡績業界は技術の欠乏にあえぎ、三重紡績所も苦境に立たされていた。設立時の機械払い下げ代金の支払いは、1881年から始まるが、経営悪化のため機械代金の延納願いを1886年まで6回提出した。

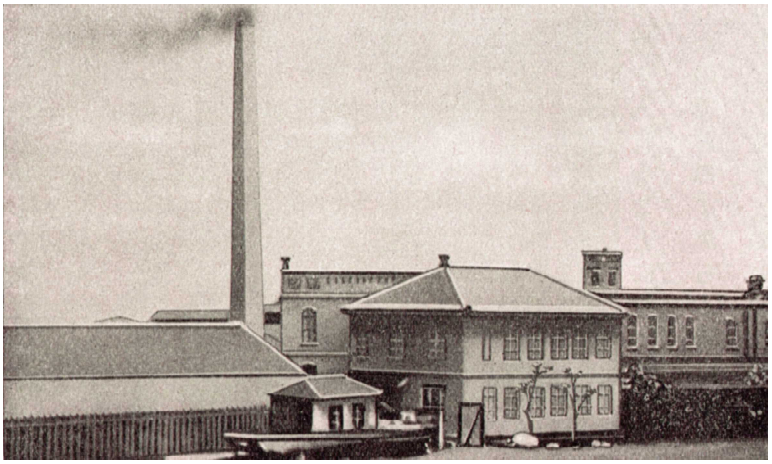


手回し米紡機
出典：『十世伊藤伝七～綿糸を紡ぐ～』

■渋沢の援助で危機を乗り切り三重紡績会社を設立、後に東洋紡績を築く

伊藤伝七の苦境を知る三重県令石井邦猷は渋沢栄一を紹介した。渋沢は各紡績と引け目のない競争するには、会社化と大規模化を説き、資本金22万円の半額を援助した。三重紡績会社は1886（明治19）年11月18日に創立し、株式組織となった。工場は四日市濱町とした。渋沢は優秀な日本技師をつくることを勧告し、技師長に造幣局技師斎藤恒三を推薦した。入社後斎藤は工場の設計や英国紡績事業の視察・技術実習・紡機の買い入れに従事した。伊藤は川嶋時代に専門の技術がなく非常に苦い経験から、斎藤には破格の月報百円を支給し優遇した。斎藤は部下に心を込めて訓育養成に努めた。

欧米を視察した斎藤は、漁網に使用する綿網は価格低廉で耐久性を知り、撚絲機と製網機を注文して製織に着手した。三重紡は我が国で唯一の製網設備所有の紡績会社となった。また斎藤は英国の紡績実習中に印度の綿花（印綿）の使用方法を研究した。明治政府は1889年、印綿の調査を始めた。調査に同行の三重紡の杉村僊之助は、斎藤と共に印綿の二十番手紡出を始めた。印綿使用の二十番手紡出は、三重紡を以って我が国の嚆矢となった。



明治21年三重紡績会社本社工場竣工　　出典：『東洋紡績 70 年史』

三重紡績は良き人材に恵まれた事で我が国最大の紡績会社となり、模範紡績として天下を衝撃させた。渋沢の助言で大阪紡績会社と合併、東洋紡績会社を1914（大正3）年に設立した。東洋最大の紡績会社を築いた伊藤伝七は二代目社長に1916年に就任した。その年に欧州大戦が勃発、紡績業界は綿糸暴騰で黄金時代を迎えた。東洋紡績も莫大な社内留保金を得た。伊藤伝七は1920年東洋紡績社長を辞任、紡績業界から身を引いた。

（大橋公雄）